

1101111



おかげさま

私達宮大工は、古くから木と向き合い、木を組み上げる技術を磨き上げてき

ました。その技術は長い年月と、多くの職人達によつて伝えられ、

現在その精度は究極というところまで来ていると言えます。

現在の建築では、まず、物事はデザインされ（あるいは

図面化され）そのデザインに向けて、素材と技術は

デザインを完成させるために使われ、いかに速く、

いかに正確であるかが問われ続けています。

それは、言い換えるなら工期と品質という

言葉になります。この「工期と品質」と

いう言葉だけで「技術」を語ることは

できるでしょうか？

高度な技術は日々研究開発され、工

期と品質は今後さらに高められ

ていくでしょう。そんな時代に

我々職人はどう対応していく事

が必要でしょうか。技術とい

うものは、単に物を加工する

作業精度ではありません。

「わざ」

加工技術から技術思考へ

菅原雅重

ノミ、カンナなどの手道具を

つかい、木を精密に組み上げ

ていく技を身につけることは

当然です。これからは身につ

けた技術を社会の中で、どのよ

うに生かしていくか、それを見つ

ける為にも、技術と思考が結びつ

くことが大切と感じています。技術

を持つ事で、普通であれば「できない」

と諦めてしまう、もしくは考えようとも

しない、そういった思考に覆いかぶさつて

いる壁を取り払う事ができると実感します。

プロのスポーツ選手は、我々がアツと驚くよう

な自由なイマジネーションを持ったプレーを見せて

くれます。それは高い技術があるからこそ、そういった

プレーをイメージすることができないのでしょうか？

我々もプロの職人として、高い技術を身につけ、それと同時に常に

思考していく事が大切になると強く感じています。

伝統の 先へ

おかげさまでは昨年11月に「エキップホテルパリ」という、パリで2年に1度開催される国際的な展示会に単独ブースを設け出展しました。世界各国から1200社以上の企業に参加し、期間中11万人を超える関係者が訪れる大きなイベントです。

今回、パリに持って行ったのは「一本の木を全て使い切る」ということがテーマの「応樹織床」という名の床材です。

展示会への出展は、おかげさまでは国内を含めても初めての試みでした。せっかく見てもうなら、数ある展示会の中でも特に評価が厳しいといわれているパリへ行ってみよう、思い切って海外への出展を決めました。会期中はホテルのオーナー、建築の関係者など、数多くの方々がブースを訪れてくれました。どなたからでも、とても高い評価をいただき、数名の方からは「この展示会場で最も素晴らしい」と、とてもありがたい言葉も頂きました。また、実際の仕事につながるお話をいただき、現在その準備にも取りかかっています。

この帯広という地方都市でも、日々真剣に仕事と向き合い考え続けることで、世界と渡り合える仕事ができるということは何より自信となり、それがおかげさま全体の自信となっていくと思っています。

「応樹織床 おうじゆしよくじょう」

私たちの作る床材や壁材は、一本の木に出会う事からはじまります。森に入り、一本の木を伐り出し、その木の全てを余す事なく使います。

禅や精進料理の世界では、全てを使い切ることを、素材に応じて自らの考え方を変化させることを「応量器」「応機接物」などの言葉にあるように「応」の字を持って表します。

その意志を受け継ぎ、私たちの床には「応樹織床」と名付けました。

通常、材とする事が不可能と考えられている幅10センチ程度の細い部分や、曲がっている使用ようがないという丸太にも、全てに日本の職人の技と心を持って、命を吹き込みます。自然の中にある「木」という素材をありのままの形で受け入れ、人が織り上げる。デザイン無きデザインの美しさを伝える床です。



展示会に出品した床材「応樹織床」。下記 QR コードで「応樹織床」の動画を配信しています。



右：展示会の会場、ポルト・ド・ヴェルサイユ見本市。

左：おかげさまのブースの様子。

鉋

ちょうな



湾曲した柄が特徴的な鉋。その原型は石器時代まで遡るほど大昔から人類に使われ続けてきた道具の一つです。丸太の皮を剥いだり、荒く平らにするために用いられます。鉋で畑を耕すような動作で材料の表面に刃物を打ちつけるように使用します。台鉋は平らな材料にしか使えませんが、鉋は曲がった材料でも関係なく使用でき、木の本来の表情を残したまま仕上げるができるのが魅力で

す。削り、浮かび上がって来る木の質感と模様には、人間の力ではコントロールできないからこそ生まれる独自の風合いがあるのです。鉋を使いこなすためには、相応の経験が必要となります。現在、鉋を使用する仕事は少なく数寄屋造や茶室などの極めて限定的な条件でしか使われていないのが現状です。おかげさまで鉋に触れる機会を増やし、機械にはできない手仕事のすばらしさを求めていきます。

右：木割りした丸太の表面を鉋ではつる。
左：鉋で仕上げた木の表面。



〈現場より〉 この場所に必要なる建築物を追い求め

音更町の農村地、畑に囲まれた丘の上に佇む tooi (トイ) は、兵庫から移住した中西さん夫妻が2019年に始めた石窯焼きのパンとコンフィチュールのお店です。オープン時、店舗をおかげさまで施工したご縁があり、この度同敷地内に新しく建物を建てている最中です。敷地内にあった古い牛舎の面影を残して欲しいと要望があり、そのままリノベーションする方法もありましたが、一度解体し、牛舎の古材一本一本と向き合い新たに建築することにしました。長い時間を過ごしてきた古材に手を加えることを最小限に抑えることをテーマに、規格寸法にとられない独自の建築が現在進行しています。



上：解体中の牛舎。
下：牛舎のあった場所に新築。牛舎の古材ありきで設計を行ったため、古材が不均一に並ぶ。



木々はうたう

丸瀬布

2018 — 2022

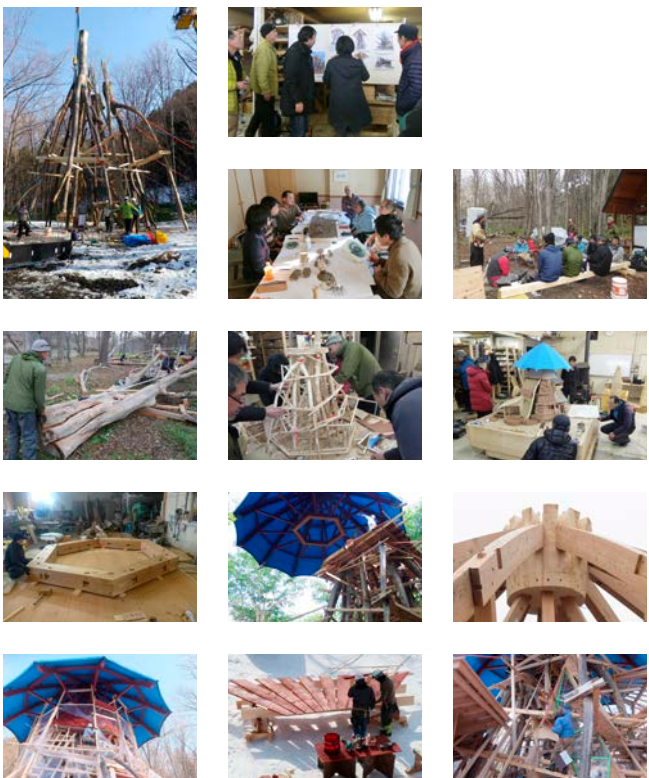
北海道の森を生かした、子ども達の集う場所づくり。設計からかざえると、丸五年かかったプロジェクト「マルセツプ」の工事が昨年完了しました。

設計者11名、参加大工35名。たった二人だけのおかげさま。本当に、たくさんの方々のおかげで、無事に完成する事ができました。

「木」そのものに、向き合いながら考え続けた五年間でした。

職人が現場で考えたことが図面化されたり、さしがねを持った設計チームが現場で指示をしたりと、今までにない関係性のチームで建築ができたことは、技術の思考というもののづくりに少し近づけているのではないのでしょうか？

難しい仕事ばかりの現場でしたが、集まってくれたたくさんの方の職人さん達の技術を結集すれば、「できない」と考えたことは一度もありませんでした。





3 おかげさまで
働く人々

島 秀 則 大工



「元々は寿司職人になりました
かったんだ」。仕事中はめつ
たに見せない笑顔でそう話し
てくれた島秀則さん。おかげ
さまでは「ヒデさん」の愛称
でおなじみの島さんは、大工
歴四十年の大ベテランだ。ど
んな難解な加工も「どうにか
なるんでねえか」と呟き、黙々
とやり遂げてしまう。
仕事に関しては多くは語ら
ず、やることはきっちりやる。
それでいて、誰かに困ったこ
とがあつたら親身になって話
を聞き、手助けしてくれる。
そんな職人肌の島さんだが、
趣味は料理に家庭菜園、魚釣
り、模型やドールハウス作り
など、興味のあることは尽き
ないのだそう。もしかすると
常日頃から様々なことに関心
を持ち余暇を楽しむことが、
応用力の高い仕事ができる
人間になる秘訣なのかもしれ
ない。

あ と が き



七年前に一人ではじめたおかげさま。
本当にありがたい事に、色々とお声がけ頂き一年、ま
た一年と過ごしてきました。

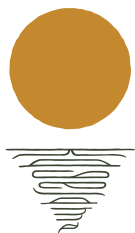
ここ数年は一緒に働いてくれる人も、少しずつ増えて
きています。おかげさまというチームが出来始めてい
る時期だと感じています。

まだまだ未熟ではありますが、日々技術の向上を怠ら
ず、社会の変化を感じながら、ものづくりと真剣に向
き合っていきたいと考えています。

そして、決して完熟する事なく、常に関わる人々が、
課題に対して前向きに取り組む、そんなチームを目指
しています。

今年は少し大きな現場も始まりますが、やることは今
までと変わらず、コツコツと進んでいこうと思ってお
ります。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。



「おかげさま」は多様な由来を
持ち、「陰と陽」つまり「光が
あるところには影ができる」
という意味合いもあります。
輝く朝日や夕日、月光の下で
は影ができるように、わたし
たちは人々の集まる「場」の
裏方として、つくり、守り、
支えてゆくという大切な使命
をこのしるしに込めています。



株式会社おかげさま

帯広市東三条南八丁目十六番地一

電話：〇一五五―六七―五八六一

FAX：〇一五五―六七―五八六一

<https://okage-sama.com/>